

# 不可能を意味する「知らず」について

(一) 辭啓者天皇天命恐・被賜仕奉者拙久劣而無所知・進母不知・退母不知・天地之心母勞久重・百官之情母辱愧

美奈  
母 隨神所念坐（神龜元年二月甲午詔）

(二) 挂畏我皇天皇・斯天日嗣高御座乃業乎受賜且仕奉止負賜聞・頂爾受賜理恐末・進毛不知・退毛不知爾・恐美

止久 宣天皇御命乎衆聞食勅（天平勝寶元年七月甲午詔）

(三) 朕又念久・前聖武天皇乃皇太子定賜比・天日嗣高御座乃坐爾昇賜物乎・伊何爾可恐久私父母兄弟爾及事得牟・

甚 恐自・進母不知・退母不知止伊奈備奏（天平寶字三年六月庚戌詔）

その他天平寶字二年八月庚子朔詔・寶龜元年十月己丑朔詔・天應元年四月癸卯詔・天長十年三月癸巳詔・嘉祥三年四月甲午詔・天安二年十一月七日詔・元慶元年正月三日詔・同八年二月二十三日詔等にも、上の天平勝寶元年の詔のに似たお言葉が拜せられる。これらの中圈を施した句につき、宣長は之をススム・モシラニシゾク・モシラニと讀んで「いたく恐みてせむすべしられぬさまを詔給ふなり」續紀歷朝詔詞解第五詔の釋」と解してゐるが、その意味ならば寧ろススム・モシラニシ（リ）ゾキ・モシラニと讀む方が適當であらう。萬葉集に

(四) 石木乎母乃比佐氣斯良受（卷五・國歌大觀七九四）

(五) 佐和久兒等遠宇都豆波死波不知（同・八九七）

(六) 言不得名不知（卷三・三一九）

不可能を意味する「知らず」について

## 七) 言毛不得名付毛不知(同・四六六)

古今和歌六帖に

(八) いひしらで入目つゝみにせかれにし池の水ともゆかぬ心か(第三帖・三二五二五)

これらはいづれも「進み知らず」「退き知らず」「問ひ放け知らず」「死に知らず」「名付け知らず」「言ひ知らず」といふ各一つの複合語であつて、(一)(二)(三)(五)(六)(七)の場合には、その二つの構成要素の間に、「も」又は「は」といふ助詞が挿入されてゐる。これは上代の言語では決して珍しいことではない。

由比底之綱乎登。伎毛安氣。奈久爾(萬葉卷十七・三九四八)

波布都多能由伎。波和可禮受(同・三九九一)

これらは各「解き開く」「行き別る」といふ複合語の二つの構成要素の間に、「も」「は」といふ助詞の挿入された例である。上の(六七)の引用文の中で「名付けも知らず」「名付け知らず」と對になつてゐる「言ひもかね」(言ひかね)などもやはりさうである。かやうに形の上からは二つに別れてゐても、意味の上から見ると全く一つに融合してゐるものならば、複合語と呼んで差しつかへは無いと思ふ。それと同じ意味に於て、「進み知らず」等をもここで複合語と呼ぶのである。これらの「知らず」は本来「……するすべを知らぬ」といふ意味であるが、結局は不可能を意味することになる。「進みも知らに退きも知らに」は「進むすべも知らず退くすべも知らず」結局「進まん方も無く退かん方も無し」といふ意味になる。「問ひ放け知らず」は「問ひ放けるすべを知らない」結局「問ひ放けん方無し」といふ意味になる。

この種の複合語は、奈良時代には、相當自由に作られたもののやうに見えるが、平安時代中期以後まで保存されたの

は、唯「言ひ知らず」(言はん方無し)だけである。

そへにとてとすればかかり、かくすればあないひしらず、あふさきるさに(古今集俳諧)  
御屏風ども立て渡し、いひしらずきよらなり(宇津保物語藏開下)

あけぬさて今はの心つくからに、などいひしらぬ思ひそふらん(古今集戀三)

かむなびの種松と申す、いひしらぬ寶の王侍り(宇津保物語吹上下)

以上四つの實例は大日本國語辭典に據つた。但し同書ではこの語を

いひしる 言知(他動四) 言ひかたを知る。言ひ得。勢語「まだ若ければ、文もさささしからず、言葉も言ひ知らず」年中行事歌合「詞いひしりてよろしく侍れども」

の標目の下に出して居るのであるが、それとこれとは別物のやうに思はれる。「いひしる」(言知)は、言ふことをよく心得てゐる、言ふことに精通してゐる、言ふことに熟練してゐる、といふ方面から「言ひ得」といふ意味に轉じて來たのであるが、「問ひ放け知らず」などの「知らず」にはそれ程深い意味は無く、ただその場合についてせんすべを知らないといふ意味から、結局不可能をあらはすやうになつてゐるだけのことである。「言ひ知る」の「知る」は、一往可能をあらはすものとは言ひ得るけれど、その可能は十分な可能、完全な可能、往く所として可ならざるはない可能であつて、或人の身についた永續的な能力を言ひ表してゐる。従つてその打消である「言ひ知らず」(上に引用された伊勢物語の例の如き)は、單にその能力の完全さを否定するのみであつて、全く何も言ひ得ないといふ意味にはならない。即ち未熟・無經驗の意味である。之に反して、「言ひ知らず清らなり」や「言ひ知らぬ思ひ」などの「言ひ知らず」は、全くどうにもかうにもならない完全な不可能を意味してゐる。

伊勢物語の「言葉も言ひ知らず」に近い「知らず」の用法は、萬葉集の中では

美知乃奈加久爾都美可未波多妣由伎母之思良奴伎美乎米具美多麻波奈（卷十七・三九三〇）

のやうな場合に見られるのである。ここでは「ししらぬ」は熟練・精通の否定、即ち未熟・無經驗を意味してゐる。今昔物語卷第二十八頼光の郎等共紫野見物の語に「一人が云はく、去來某大徳が車を借りてそれに乗りて見む、と。亦一人が云はく、乗り知らぬ車（不<sub>レ</sub>乗知<sub>ニ</sub>ヌ車）に乗りて殿原に値ひ奉りて、引落して蹴られて由なき死にむやせむすらむ」とある。「乗り知らぬ」なども略同様であるが、これに至つては、未熟といふよりは寧ろ全くの無經驗であるから、伊勢物語の「言葉も言ひ知らず」などの場合とは少し變つてゐる。併し要するに「乗りつけない」「乗り慣れない」といふ意味であるから、變つてゐると言つても程度の問題で、結局は前の「言ひ知らず」や「ししらぬ」と同じ類の用法と言つてよいと思ふ。

「知る」といふ言葉が、精通・熟練従つて能力の所有を意味するやうになつてゐる例は、外國語にも有る。片山正雄氏著「雙解獨和大辭典」wissen の標目の下に「(mit inf. mit zu: verstehen, können) 出來る、心得てゐる。」として次のやうな例が出て居る。

sich zu helfen wissen 方法を心得てゐる、凌ぎをつけることが出来る。

sich nicht zu fassen (od. halten) wissen 我慢しきれぬ、夢中になりかける。

zu leben wissen 禮儀作法（世の中の義理、人情）を心得てゐる。

er weiss es zu machen 彼はその仕方（方法）を心得てゐる。

zu reden wissen 話が上手である、能辯である。

etwas zu tun wissen 或事をすることが出来る。

なほ同氏著「獨逸文法辭典」に「kennen は主として人又は物の外形を知れる事（人の顔を知れること、面識のあること）、wissen は事實、報知等を知れる事即ち之に關する知識、記憶、又或事に關する熟練等を有すること」とあることを念頭におけば、右の實例は一層よく理解される。英語の know や獨逸語の kennen が「知る」といふ意味から轉じて能力を意味するやうになつた過程はどんな風なものであつたか、詳しく専門家の御教示を受けたいものである。

### 参 考

右のドイツ語の *kennen* と *wissen* と幾分似た轉義の例として、支那語の「會」の場合を擧げることが出来る。即ち禪籍類に見える

會與不會都來是錯。（臨濟慧照禪師語錄）

學者不會，便向表顯名向上生解。（同）

不是娘生不便會，還是體究練磨一朝自生。（同）

師見僧，來展開兩手。僧無語。師云會麼。云不會。（同）

等のやうな「會」の字は、我が國ではエスミ讀んで、領解（さとる）の義であるが、宋代の小説類では、「會」は既に多くは能力を表す語として用ゐられてゐる。もし強ひて訓讀するならばヨクスとでも言ふべき所であらう。

羅漢曰、會講法華經。玄奘曰、此是小事。（大唐三藏取經詩話）

不可能を意味する「知らず」について

然你也會邪法。我將爲無人會使此法。(同)

除是法師會飛、方能到彼。(同)

原來這女兒會繡作。(碾玉觀音)

因他一牀樂器都會、一府裏人都叫做李樂娘。(西山一窟鬼)

却被媒人哄誘、嫁了這個老兒、只會吃飯。(錯斬崔寧)

此の用法は現代官話にも存在する。吳主惠氏は「你會說中國話嗎。」と「你能說中國話嗎。」との區別を説明して左のやうに言つて居られる。「前者は支那語を學んで(經驗または練習して)出来るか(つまり心得てるるか)………」。「Know How」會得して出来るかどうかの意であり、後者は生れ付き出来るか(身體的能力)どうかの意である。」(支那言語組織論一九五—一九六頁)。

## 追記

本稿の原形は、昭和十年刊「藤岡博士功績記念言語學論文集」に收められたものである。「進毛不知・退毛不知」に關する卓見に對し、菊澤季生氏は、翌年「國語研究」五月號に於て、萬葉集の

速川之往文不知、衣袂笑反裳不知(卷十川 3276)

を引いて、「ススムモシラニとよむのも一案ではあるが、ススムモシラニを否定すべき證明は未だ盡されてゐない」と評せられた。併し、この句は

百不足山田道乎、浪雲乃愛妻跡、不語別之來者、速川之往文不知、衣袂笑反裳不知、馬自物立而爪衝……

と續く所にあつて、「往文不知」にはユクヘモシラズ・ユクヲモシラズ・ユクモシラズ・ユクカモシラズ・ユカクモシラニ等、「反裳不知」にはカヘルモシラズ・カヘルモシラニ等、訓に諸説はあるが、何れにしても、その意味は萬葉考に「思ひにほげしさまなり」とある通り、物思ひに耽るの餘り、足が現に何方へ向き、何處を陥んでゐるかを意識しない有様を表してゐるものである。従つて、不可能を意味する「知らず」とは、全然場合が違ふ。

之に對して、宣命の場合は、今日に傳はる最古の實例に據れば

辭が啓さば天皇が大御言恐く、

賜はり仕へ奉らば拙く劣くて知る所無し。

進毛不知、退毛不知

と續くのであつて、これ明かに進退兩難の場合であり、「進むすべも知らず、退くすべも知らず」即ち「進むことも出來ず、退くことも出來ず」の御意と拜察される。故に、かの「言ひもかね、名付けも知らに」等の例に倣つて、「進みも知らに、退きも知らに」と拜讀するのを穩當と考へるのである。

昭和十九年七月十五日 印刷  
昭和十九年七月二十日 發行

國語音韻史の研究

◎定價七圓八十錢

特別行爲稅相當額七十錢

合計 八圓五拾錢

(一四五〇部)

出文協承認 あ460208



著者 有坂秀世

發行者 清水達夫

東京都澁谷區大和田町四十二番地

印刷者 北川武之輔

東京都京橋區銀座四丁目四番地

印刷所 (東東六〇) 細川活版所

東京都神田區淡路町二ノ九

發行所

東京都澁谷區大和田町四十二番地

明世堂書店  
振替東京八三九三三  
電話澁谷三八〇二  
會員番號一三四〇一一